

ピョートル・ワイリ氏訪日記

1997年11月2日から10日にかけて、文芸評論家でエッセイストのピョートル・ワイリ氏が来日し、東京、京都、奈良を訪れた。氏のことはいまさら紹介するまでもないと思うが、昨年シンポジウムのために来日したアレクサンドル・ゲニス氏との数多くの共著がある（詳しくは未知谷刊『亡命ロシア料理』の訳者あとがきを参照）。77年に旧ソ連から米国へ移住、執筆活動や亡命ロシア人向けの新聞・雑誌の発行、ラジオ・リバティでの番組制作に携わった後、二年前にプラハへ移住。現在は、ラジオ・リバティのプロデューサーをしながら単独で執筆活動が続けている。今回の来日目的は観光ということだったが、現在「外国文学」誌に不定期連載中の紀行文のネタ探しの旅でもあったようだ。

東京には一泊しただけで、二日目の午後にはさっそく単身京都へ。金閣寺や竜安寺、嵐山などを散策。三、四日目は、遅れて合流した筆者とともに京都・奈良巡り。京都では南禅寺、永観堂、哲学の道、銀閣寺を、奈良では東大寺、興福寺、旧市街である奈良町を訪れた。「市バスの日フリーパスを買うとお得」「ここは九年前、河豚刺しを買って宿に持ち帰り食べた思い出の魚屋（京都の錦市場で）」など、随所で地元出身である筆者をもたじたとさせる通ぶりを発揮した。ほとんどどちらがガイドかわからないような「迷」ガイドぶりにも、「案内のお礼だ」といってこちらに一銭も払わせてくれないのには恐縮してしまった。普段ロシア人とのつき合いではお金で気を遣うことが多いのだけれど、今回はまた別の意味で気を遣った珍しいケースであった。道すがら、日本人の生活様式やものの考え方、現代日本の抱える社会問題などについての鋭い質問を次々と繰り出し、ジャーナリスティックな興味を満たそうとしていた（筆者のつたない答で興味が満たされたのかは定かでない）のも印象的だった。

7日には再び東京へ。銀ブラを楽しんだ後、本郷の東大を訪れ、スラヴ科の学生に現代ロシア文化について講義をしてくれた。折しもこの日はロシア革命八十周年記念日。話はそこから、現代ロシアの文学を含む文化全般へと広がっていった。詳しくは研究室にある録音テープを聞いて頂きたいが、あえてまとめれば（1）「革命によって生まれたソヴィエトの遺産の評価・位置付けの段階にある現代ロシア文化」、（2）「亡命文学のその後」というようなサブタイトルをつけることができるだろう。長く国外に住みながらも、常にロシアの読者に向かって情報を発信してきた氏らしく、「内の視点」「外の視点」の両方を持ち合わせたバランス感覚が光った。講義後、皆ずっとしたかったのだからできないでいたワイドショーの芸能レポーター的な質問（「単独で書くようになったのは、相棒ゲニスと喧嘩別れしたためか？」）が、某院生によってずばり発せられたが、「年をとれば誰でも一人になりたくなるものさ」とさらりと受け流すあたり、さすがに大人であった。

東京での残りの日々は、築地の朝市や歌舞伎鑑賞など、やはり精力的に動き回ったようだ。来日は二度目、和食通で、おまけに「超」のつく行動派の氏。「一人で大丈夫だろうか？」とのこちらの心配をよそに、縦横無尽に日本を駆け巡った。今回仕入れた「ネタ」は持ち前の手際よさで料理し、「外国文学」誌上で披露してくれることだろう。というわけで、最後まで父称を明かしてくれなかった「ペーチャ」は、マルクスを彷彿とさせる立派なひげ（ただし写真と違い真っ白）と人懐っこい笑顔、愉快的思い出を置き土産に、そして我々の現代ロシアの文化や文学への新たな関心を掻き立てて日本をあとにした。

（今田記）